

<前回：歴史と終末>

(1) 歴史と終末

1. 旧約的な歴史思考：

・ゲルハルト・フォン・ラート『旧約聖書神学Ⅱ イスラエルの預言者の伝承の神学』
日本基督教団出版局。

「西欧人がそこで多少とも素朴に生きている時間の表象は直線的である。時間は無限の直線に喩えられ、その線上に彼らは過去および未来の出来事を、彼らに確かだとわかる限りにおいて、記入できると考えている。この時間の線には中心がある。つまりわれわれの現在である。」(140)

「あらゆる出来事に先行する絶対的時間をイスラエルが知らなかったということ、これは今日確定している数少ないことの一つに属する。」

「二つの年代記的平行にあわせて一つの時間の直線に記入する試みをしなかった」、「両王国のそれぞれが自己の時間を保持している。」

「すべての出来事はその特定の時間的秩序をもつのである。出来事は時間なしには考えられず、時は出来事なしには考えられない。」

「古代人はこの時間的秩序があらゆる人間的活動、否、そればかりか内的な感情にさえあてはまると考えていた。」

コヘレト3・1以下

「物事とか活動に定められた時を誤らず、その神秘にみちたカイロスを知るには、広く知恵を召集する必要があったのである。」

「彼が時そのものをそもそも知らず、人間生活が多くの時の流れから成り立つと考えられるのである。」(141)

「預言者による歴史思考の終末論化」

「ヘブライ人のメシアニズム」

(佐藤敏夫『永劫回帰の神話と終末論——人間は歴史に耐えうるか』新教出版社、40)

2. ティリッヒの「問いと答え」における「歴史と終末」

歴史の両義性(たとえば、善と悪)と、終末における一義性・一義化(最後の審判)

(2) 歴史という問い

3. 人間的現実としての歴史とその多義性

存在論的構造／伝統・思考方法／時代動向

人間存在の歴史性(すべての文化圏・民族は歴史を有する)。

キリスト教は歴史的思考を特徴とする(ほかの伝統との対比)。

近代化は歴史化である。

4. 西欧近代と歴史主義

近代化は歴史化である。→ 歴史相対主義へ

価値や制度などが歴史の文脈で形成されたということの意識・自覚。

(3) 法則性と自由

6. ヘーゲル：絶対精神の自己実現と英雄。理性の狡知。

7. マルクス：世界史の法則性と人間の自由。

・「無名の存在を現実的基盤として理解する」、客観主義的、構造主義的な解釈。古典的な正統マルクス主義の立場、諸個人を完全に括弧に入れる。

共産主義社会は歴史の必然性において成立する。客観的法則の自動的な展開。

・「諸個人の役割の優位性」。革命家の主体的な歴史参与の必要性。(リクール『イデオロギーとユートピア——社会的想像力をめぐる講義』新曜社。第五回、第六回)

cf. ティリッヒのマルクス論

8. レーヴィット：キリスト教的歴史観の世俗化としてのヘーゲル、マルクス。

(4) キリスト教的思想の文脈で

9. 自由意志と神の恩恵：パウロ→アウグスティヌス→ルター
 予定・摂理
10. 自由意志の擁護と原罪概念
 ペラギウス論争、セミ・ペラギウス
 ルターの奴隷意志論、エラスムスとの自由意志論争
11. 賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、
 2009年。(Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.)
10. 神の恩恵が自由意志を可能にする、という仕方での解決。
 → 神のリスク（弱い神）と人間の責任。

(5) アウグスティヌスの終末論——古代の黙示的終末論からの離脱

(6) フィオーレのヨアキムと歴史神学

(7) 二つの終末論——イデオロギーとユートピア

22. ティリッヒ『ティリッヒ著作集・別巻二』白水社、257-276頁。

「フィオーレのヨアキム（彼の創設になるカラブリアの修道院の場所によってこう呼ばれる）は、ちょうどサン・ヴィクトールのフーゴーが現実のサクラメント的解釈を提供したように、歴史のサクラメント的解釈を与えた。彼の歴史哲学はアウグスティヌスのそれとは対立するものであって、アウグスティヌスの歴史哲学が多くの保守的運動の背景をなしているのに対し、ヨアキムの歴史理解は中世および近代における多くの革命的運動の根底となった。」

「アウグスティヌスはキリストの一千年支配を現在すでに開始しているものとし、それを教会のヒエラルキアおよびその神的恩寵手段による支配と同一視する。教会はそのサクラメント的力によってキリストを直接媒介する媒介者であり、キリストの一千年にわたる君主的支配は教会の君主的支配と一致することになる。……教会が批判されるのはそれが混合体(*corpus mixtum*)である限りにおいてであり、その基礎に関しては批判され得ないのである。アウグスティヌスはこのような仕方、千年王国の期待の中にひそむ教会に対する批判および脅威をとり除いたのである。」

「ヨアキムは千年王国の到来という表象を新しいものとした。……フランシスコ会のラディカルな方向は、これらの理念を自分のものとし、それらを自分自身の属する修道院に適用し、そこから教会を批判した。多くのセクト的運動やアメリカにおいて影響をもつようになった宗教改革のセクト主義者たちは、直接的にせよ間接的にせよ、フィオーレのヨアキムに依存している。」

23. バーナード・マッギン (1998, 361) :

「終末の日に到来し、あらゆる人間悪を総括するただ一人の人間という伝説的人物への信仰は、われわれにとって、もはやほとんど不可能であろう。しかし、この千年紀が終わろうとするとき、われわれは、今なお、われわれひとりひとりの内と外にある欺瞞、そして、もっとも警戒を要すべき全世界に跨る悪としての欺瞞、つまり、キリスト教徒が時代を問わずキリストの本質と信じてきたものに反する悪について、反省する必要がある。」

6. 預言者とグローバル化

*関連年表***

- 前 1010 頃：イスラエルに王制導入（サウル王）
 997：ダビデの統一王朝開始、エルサレムへ遷都
 965：ソロモン王即位
 948：エルサレム神殿の建設
 926：王国分裂、北イスラエル王国と南ユダ王国
 878：北イスラエルの首都がサマリアに遷都
 9世紀半ば：預言者エリヤとエリシャが活動

- 750: 預言者アモス活動
- 747: 預言者ホセア活動
- 735: 預言者イザヤ活動開始
- 722: 北イスラエル王国がアッシリアによって滅亡
- 701: 南ユダ王国がアッシリアに包囲、預言者ミカ活動
- 627: 預言者エレミヤが活動開始
- 621: 大祭司ヒルキヤが修理中の神殿から古代の文書発見
- 597: 新バビロニアがエルサレム包囲。第1次バビロン捕囚
- 587: 南ユダ王国が新バビロニアによって滅亡、第2次バビロン捕囚
- 586: 捕囚時代(～538)。預言者エゼキエル活動開始
- 538: ペルシア王キュロスにより解放、捕囚民の帰還開始
- 520: 神殿再建開始
- 515: 第二神殿完成

(0) 危機の諸原因と12部族イスラエルの構成

1. 危機の原因

- ・内的原因: 統一王国内部の社会矛盾＝南北問題＋格差問題
- ・外的原因: 国際状況の変化＝大国の台頭(軍事拡張政策)

2. 統一王国の分裂。

「ユダ部族の王」の支配に対する北王国の人々の反感と不満は、ソロモンの死によって爆発した。」(山我、98)

3. アッシリア(イラクの北部を中心にする。最盛期にはメソポタミアの全土とエジプトまで)の西方進出。北イスラエルは滅亡、南ユダは属国。

4. 南ユダ王国 → バビロン捕囚 → 帰還した民と民族再建の希望

5. 前6世紀: アッシリアからエジプト、新バビロニア、そしてアケメネス朝ペルシアとオリエン特諸民族の状況は激変した。

6. 失われた10部族と、生き残ったユダヤ人。

民族的アイデンティティの持続の相違。イスラエル人からユダヤ人へ。

7. 「サマリア人」の起源: アッシリアによってサマリアに移住してきた諸民族と残留したイスラエル系住民との混じり合い。

民族的混淆: サマリア人

宗教的混淆: サマリア教

(1) 預言者とその思想的課題

8. 古代イスラエルの宗教家: 祭司、預言者、知者

「神の啓示を受け、神の名によって語る人」「預言のカリスマ」

神の言葉 → 預言者(言葉を預かる) → 王、民衆

「政治的状况で発言を行う扇動政治家・政治評論家」(ウェバー)

9. 先見者(ホーゼー)、見者(ローエー) cf. 恍惚預言者群

預言者(ナービー)

古典記以前の預言者: サムエル、ナタン、エリヤ、エリシャ

記述預言者

三大預言者: イザヤ(第一、二、三)、エレミヤ、エゼキエル

小12預言者: ホセア、ヨエル、アモス、オバデヤ、ヨナ、ミカ、ナホム、

ハバクク、ゼファニア、ハガイ、ゼカリヤ、マラキ

10. 民族の危機＝契約思想に基づく古代イスラエル宗教の危機

契約思想: 神(主・ヤハウェ)とイスラエルの契約

子孫繁栄と土地取得の約束、信頼

→ 約束成就のプロセスとしての歴史

歴史の現実＝国家・民族滅亡の危機（バビロン捕囚、神殿崩壊）

↓

預言者はこの危機に直面して、古代イスラエル宗教の再生という課題に取り組んだ。
歴史意識の転換（契約思想の危機を乗り越える歴史の再解釈）

イスラエル民族の歴史的危機（バビロン捕囚）→預言者による歴史の再解釈（契約違反＝罪と、罰としての滅亡）→イスラエル民族宗教の変革

↓

民族神から、諸民族の神へ（正義の神）。排他的一神教。メシア待望。

11. 滅亡預言：契約を破ったイスラエル（罪）への罰としての危機

<アモス 3 >

13 万軍の神、主なる神は言われる。聞け、ヤコブの家に警告せよ。14 わたしがイスラエルの罪を罰する日に、ベテルの祭壇に罰を下す。祭壇の角は切られて地に落ちる。15 わたしは冬の家と夏の家を打ち壊す。象牙の家は滅び、大邸宅も消えうせると、主は言われる。

<イザヤ 2 >

1 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た幻。これはユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである。2 天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる。わたしは子らを育てて大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。3 牛は飼い主を知り、ろばは主人の飼い葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず、わたしの民は見分けない。4 災いだ、罪を犯す国、咎の重い民、悪を行う者の子孫、墮落した子らは。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けた。5 何故、お前たちは背きを重ね、なおも打たれようとするのか、頭は病み、心臓は衰えているのに。

12. 救済預言：救済の約束、契約の更新＝新しい契約 → キリスト教では、イエス・キリストをこの預言の成就と解釈する。新約＝新しい契約

<イザヤ 42 >

1 見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ、彼は国々の裁きを導き出す。2 彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。3 傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。4 暗くなることも、傷つき果てることもない、この地に裁きを置くとしままでは。島々は彼の教えを待ち望む。5 主である神はこう言われる。神は天を創造して、これを広げ、地とそこに生ずるものを繰り広げ、その上に住む人々に息を与え、そこを歩く者に霊を与えられる。6 主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼びあなたの手を取った。民の契約、諸国の光として、あなたを形づくり、あなたを立てた。7 見ることのできない目を開き、捕らわれ人をその枷から、闇に住む人をその牢獄から救い出すために。

<イザヤ 49 >

5 主の御目にわたしは重んじられている。わたしの神こそ、わたしの力。今や、主は言われる。ヤコブを御もとに立ち帰らせ、イスラエルを集めるために、母の胎にあったわたしを、御自分の僕として形づくられた主は 6 こう言われる。わたしはあなたを僕として、ヤコブの諸部族を立ち上がらせ、イスラエルの残りの者を連れ帰らせる。だがそれにもまして、わたしはあなたを国々の光とし、わたしの救いを地の果てまで、もたらす者とする。

<エレミヤ 31 >

31 見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。32 この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。33 しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34 そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

(2) 預言者の思想 → 民族宗教から普遍宗教へ、グローバル化の先取り。

13. 社会正義：正義の神、不正・悪が滅亡の原因となる。民族から正義ではなく。

<アモス2>

6 主はこう言われる。イスラエルの三つの罪、四つの罪のゆえに、わたしは決して赦さない。彼らが正しい者を金で、貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。7 彼らは弱い者の頭を地の塵に踏みつけ、悩む者の道を曲げている。父も子も同じ女のもとに通い、わたしの聖なる名を汚している。8 祭壇のあるところではどこでも、その傍らに質にとった衣を広げ、科料として取り立てたぶどう酒を、神殿の中で飲んでい

14. 排他的民族主義の克服

1) 古代イスラエルの宗教＝民族宗教、選民思想

・ 民族の救いとしての歴史・終末

ダビデ王家の再建 → 救世主(メシア)はダビデの子孫から生まれる。

→ 2) 旧約聖書預言者における民族主義とその克服

・ 苦難の僕：民族の相対化と新しい使命の自覚。苦難の意味。→ キリスト教へ
民族の滅亡を通して神の正義の普遍性は実現される。

15. 民族宗教から普遍宗教へ(民族宗教自体の内部からそれを乗り越える動きが現れる)

預言者の平和思想、諸民族の神であるヤハウエ、神は他民族を通して意図を実現する。

<イザヤ2>

4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。5 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

<イザヤ19>

24 その日には、イスラエルは、エジプトとアッシリアと共に、世界を祝福する第三のものとなるであろう。25 万軍の主は彼らを祝福して言われる。「祝福されよ／わが民エジプト／わが手の業なるアッシリア／わが嗣業なるイスラエル」と。

<イザヤ53>

1 わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるだろうか。2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。4 彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだと、と。5 彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわ

たしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

11 彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。12 それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびただしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人を過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。

<参考文献>

1. G. フォン・ラート『旧約聖書神学Ⅰ、Ⅱ』日本キリスト教団出版局。
2. 関根正雄 『古代イスラエルの思想』講談社学術文庫。
3. 関根清三 『旧約聖書の思想 24 の断章』岩波書店。
4. 浅野順一 『預言者の研究』新教新書。
5. 『総説 旧約聖書』日本キリスト教団出版局、「第三章 預言書」(283-382 頁)
6. 木田献一「預言書」『聖書講座 第二巻』日本基督教団出版局、1966 年。
7. マルティン・ブーバー 『預言者の信仰』みすず書房。
8. マックス・ウェーバー 『古代ユダヤ教』みすず書房。
9. 山我哲雄『聖書時代史旧約編』岩波現代文庫。
10. 石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社。